

労働災害の約8割は、停車時に発生

停車中の危険は、すぐ側に

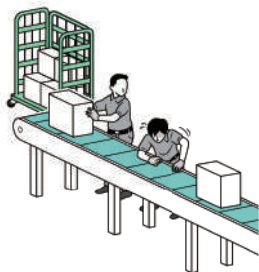
倉庫内での作業による熱中症編

労働災害は、いつ発生するか分かりません。しかし、事前の対策によりその多くは防止できるでしょう。今回は、倉庫内での作業が原因で熱中症を発症した災害例および、その対策を紹介します。

災害例

倉庫内での作業後に熱中症を発症

作業者は午前中、物流倉庫内でロールボックス/パレットからコンベヤーに荷物を降ろす作業を行っていた。休憩後、作業に戻ろうとしたところ歩行不能となり、救急搬送されたが熱中症による多臓器不全により死亡。作業者は体調不良による休職から職場復帰したばかりだった。作業場は屋内で空調管理がされており、飲料水サーバーも近くに設置されていた。



原因

- 体調不良による休職からの復帰直後であったことから、熱への順化が図られていなかった
- 熱中症予防のための指標である、暑さ指数(WBGT値※)の測定を行っていなかった
※ Wet Bulb Globe Temperature
- 労働衛生教育が不十分であった

対策

- 現場管理者は、作業を行わせる場所の暑さ指数(WBGT値)をあらかじめ測定し、関係労働者にその結果を周知するとともに、その暑さ指数に応じた対策を実施する
- 熱中症を予防するための労働衛生教育を徹底する

なんだかいつもと違う!?それは熱中症を疑ってください!

暑い環境下での作業中、自分自身でいつもと体調が違うと感じたら、すぐに周囲の人や現場管理者に伝えてください。そして現場管理者は、適切な措置を講じてください。

手足がつかる

立ちくらみ・めまい

吐き気

汗のかき方がおかしい(汗が出ない・止まらない)

周囲の人が気づけるサイン

イライラしている

フラフラしている

呼びかけに反応しない

専門知識がないと熱中症であるか判断できません!

対策について詳しくは「熱中症ガイド(二次元コード)」をご覧ください

「熱中症ガイド」はこちら

